報　　告

成人看護学実習Ⅰ（急性期・回復期）における学生の学び

茂木　英美子　川久保　和子　渡邊　佳奈　藤田　裕子　佐藤　栄子　青山　みどり
足利大学 看護学部

要旨

【目的】成人看護学実習Ⅰにおける学生の学びを明らかにし，今後の実習指導の示唆を得る。
【方法】レポートから学生が実施した援助と学生の学びを抽出した。学生の学びは記録単位として集計し，最も多かった退院指導について質的に分析した。
【結果】退院指導の学びの記録単位は全体の４割を占め，その内容は【日常生活を中心に身体・心理・社会的側面の情報を踏まえることの意義】,【自己管理への意識を高められるようなかかわり方の必要性】,【多職種と連携して継続的に支援する必要性】の３つのカテゴリーとなった。一方で，早期離床，疼痛緩和，術前の合併症予防指導の記録単位は少なかった。
【結論】レポートの記述内容には偏りがあった。回復期に重要な看護として退院指導はよく学べていた。早期離床の支援や疼痛緩和など，学生にとって実施が困難な看護援助に対する指導や，入院前からの治療・ケアの延長線上に回復期があることを強調した指導が必要と考えられた。

キーワード：成人看護学実習，急性期・回復期，看護学生，退院指導

1．はじめに

2017年文部科学省が策定した看護学教育モデル・コアカリキュラムは，学士課程における看護師養成教育において必要な内容が示されている。その中で，臨地実習における学修の在り方は，人々の治療や生活の場とそれらを支える社会資源の実際を知り，人々と関係性を築きながら，看護学の知識・技術・態度を統合し，実践へ適用する能力を身につける[1]と記されている。A大学では，成人看護学実習は1，2年次に専門基礎科目の単位を修得した学生が3年次に履修する領域別実習の一つに位置づけられる。本科目では，実習期間中に積み重ねられていく学修の成果としてレポートを課している。今回，成人看護学実習Ⅰ（急性期・回復期）の学修成果を明らかにするためにレポートの分析を行った。

教育評価は，教育の目標に照らして，教育の効果を判定することを目的にするものである[2]。成人看護学実習の教育評価についての先行研究では，実習終了後のレポート分析[3]，尺度を用いた授業過程の評価[4]，ルーブリック評価法導入後の有用性の報告[5]，また，昨今ではCOVID-19の影響にて新たに導入した教育プログラムを評価した報告[6]等，複数の報告があり，いずれも教育効果が評価され，今後の課題が示されている。レポートは，思考力や論理力，学習課題に対する科学的態度や創造的態度を評価するために有効[7]と言われている。レポートの記述内容を分析することは，学修及び教育の評価として意味があると考える。本研究の意義は，今後の実習指導の示唆が得られることである。

2．目的

成人看護学実習Ⅰ（急性期・回復期）における学生の学びを明らかにし，今後の実習指導の示唆を得る。

3．方法

1）成人看護学実習Ⅰの概要と課題レポートについて

A大学の実習目的と実習目標の要約を表1に，3週間の実習予定の概要を表2に示す。実習は学生5～6名で1グループであり，主に外科系の病棟で急性期・回復期の病期にある対象者を1～2名受け持ち，看護過程の展開を基盤として学修する。主な診療科は消化器外科，循環器科，整形外科，乳腺外科，呼吸器科，耳鼻咽喉科であり，対象者の疾患は胃癌，大腸癌，

表1　成人看護学実習Ⅰの実習目的と実習目標の要約（詳細は別途規定している）

実習目的
既習の学修内容を基盤として，急性期・回復期の疾病過程にある成人期の健康問題を査定し，その問題を解決する方法を看護過程に基づいて実践する基礎的能力を養う
実習目標
1）急性期・回復期にある対象を理解できる
2）急性期・回復期にある対象の健康問題をアセスメントできる
3）急性期・回復期にある対象の健康問題の解決に向けた看護計画を立案・実施・評価できる
4）看護実践を通して，看護の意義を見出すことができる
5）看護の役割・機能を理解できる
6）急性期・回復期にある対象への看護実践を通して，継続して看護することの意義を確認できる

表2　実習予定の概要（詳細は別途定めている）

週	場所	内容	カンファレンステーマ
1	学内または病棟	オリエンテーション，情報収集，面接など	実習目標と課題　患者紹介など
2	学内または病棟	援助の実施，面接など	看護の方向性　実施した援助の評価など
3	学内または病棟	援助の実施，面接など	社会資源について　看護師の役割と機能 実習目標の到達度と課題など

肝臓癌，膵臓癌，胆石症，心筋梗塞，狭心症，心不全，骨折，乳癌，肺癌，等である。対象者は周手術期にある場合が多いが，心不全などの慢性疾患の急性増悪の対象者の場合もある。実習前に周手術期看護に関する事前課題を課している。１グループを１名の教員が担当する。

課題レポートのテーマは〔成人期の対象に対して看護過程に基づき実施した援助とその成果・今後の課題〕，文字数制限は2,000字以上2,200字以内であり，実習最終日に看護過程の展開の記録用紙とともに提出してもらうことになっている。

２）データ収集期間

データ収集期間は2019年５月から12月までである。2019年12月に３年次生全員の成人看護学実習Ⅰが終了し，評価がされた後，2020年１月に同意が得られた学生の課題レポートを複写した。

３）分析の手順

分析期間は2022年８月から10月である。レポートの記述から，学生が実施した援助と学生の学びを抽出した。

学生が実施した援助の抽出方法：課題レポートから学生が実施した援助として記載された内容を抽出した。援助の分類においては研究者同士で意見交換した。

学生の学びの抽出方法：学生が実施した援助の文脈の中で，〜〜について学んだ等と述べられている１文章を記録単位として抽出した。

課題レポートから学生が実施した援助と学生の学びを抽出する際には，記述者である学生の視点を意識して文脈の理解に努めた。実施した援助としてレポートに記載された援助内容について，学生の学びの記録単位を集計した。記録単位が多かった学生の学びのうち，退院指導について，記録単位の意味内容を表すコード名をつけ，コードの類似性に基づいてカテゴリー化を行い，カテゴリー名をつけた。

結果の信頼性を高めるために，分析は複数の研究者で意見交換した。

4. 倫理的配慮

研究者らが所属する機関の倫理審査委員会より承認を得た（足利大学倫理審査委員会第50号）。学生には３年次の領域別実習開始時の2019年４月に研究の主旨と研究参加の同意・不同意の選択の自由及び本研究が成績とは関係しないことを口頭及び書面で説明した。同意書への署名を以って同意が得られたとみなした。

課題レポートを複写する際は，学生の個人情報が記載されていない本文のみを複写し匿名性を遵守した。複写物は研究代表者の研究室内の施錠できるロッカーに保管し，研究終了時に裁断処理をする。

5. 結果

Ａ大学３年次生90名のうち，78名の学生から同意を得た。課題レポートを読み，対象者が急性期・回復期の病期ではないと判断された５名分を除外し，73名の課題レポートを分析対象とした。以下，記録単位は「 」，コードは〈 〉，カテゴリーは【 】と示す。

１）実施した援助における学生の学びの記録単位数について

実施した援助としてレポートに記載された援助のうち，学生の学びの記録単位が最も多かったのは退院指導であった（表3）。記録単位は30であり，全記録単位の41.1％であった。次いで清潔ケア18（24.7％），術後の早期離床の援助６（8.2％），退院に向けたリハビリテーショ

表3　実施した援助における学生の学びの記録単位数

援助	学生の学び n＝73（％）
退院指導	30（41.1）
清潔ケア	18（24.7）
術後の早期離床の援助	6（8.2）
退院に向けたリハビリテーション	4（5.5）
気分転換活動	3（4.1）
不安の傾聴	3（4.1）
疼痛緩和	3（4.1）
転倒予防の援助	2（2.7）
移乗の支援	2（2.7）
術前の合併症予防指導	1（1.4）
タッチング	1（1.4）

ン４(5.5％)，気分転換活動３(4.1％)，不安の傾聴３(4.1％)，疼痛緩和３(4.1％)，転倒予防の援助２(2.7％)，移乗の支援２(2.7％)，術前の合併症予防指導１(1.4％)，タッチング１(1.4％) であった。記録単位の合計は73であった。

２）退院指導の学びについて

記録単位が多かった退院指導について，記録単位の意味内容を表すコード名をつけ，コードの類似性に基づいてカテゴリー化を行い，カテゴリー名をつけた(表4)。記録単位30から８つのコード，３つのカテゴリーが生成された。退院指導の学びのコードは〈身体・心理・社会的側面からの情報収集が大切〉,〈日常生活を知ることが重要〉,〈日常生活の不安を傾聴する必要性〉,〈対象者と共に考えることが大切〉,〈対象者の特性に合わせて工夫する必要性〉,〈早期から退院後の生活を見据える必要性〉,〈多職種連携の必要性〉,〈退院指導実施後も継続的な支援が必要〉の８つであり，これらのコードの類似性に基づいてカテゴリー化を行った結果,【日常生活を中心に身体・心理・社会的側面の情報を踏まえることの意義】,【自己管理への意識を高められるようなかかわり方の必要性】,【多職種と連携して継続的に支援する必要性】の３つのカテゴリーとなった。記録単位「退院指導を実施してセルフマネジメントの意義を確認できた」は，３つのカテゴリーのいずれにも含められなかった。

３）清潔ケアの学びについて

学生の学びには,「患者状態を観察しアセスメントしていく必要性を学んだ」「対象者に合わせた援助方法を選択することの重要性を学んだ」「対象者の活動耐性を考慮してセルフケアを促す必要性を学んだ」等があった。

6. 考察

１）成人看護学実習Ⅰ(急性期・回復期)の学修のねらい

成人看護学実習Ⅰの目的と目標は表１に示したとおりである。A大学の学生は周手術期の対象者を受け持つことが多く，その中でも術後の対象者とのかかわりが主である。術後は麻酔や手術侵襲による合併症を予防し回復を促進することが重要である。看護学教育モデル・コアカリキュラムにおいて急性期にある人々に対する看護実践の学修目標には，術後合併症を予防するための看護を説明できる[1]ことが，また，回復期にある人々に対する看護実践の学修目標には，回復への意欲を支え，より主体的な回復過程を遂げるための看護を説明できる[1]等が記されている。そのため，術前からの合併症予防指導，全身状態観察，早期離床，疼痛緩和，退院指導は重要であり，学生に学んでほしい内容である。

レポートには，レポート課題に対する思考が記述される。記録単位の多さは学生が特に思考した内容，つまり強く印象に残った学びを反映すると考えられる。結果より，A大学の学生にとって退院指導と清潔ケアの印象が強いと言える。

２）退院指導の学び

退院指導は，術後の対象者であれば主に術後障害に適応するためのセルフケア技術の習得にむけた教育的なかかわりであり，外来での継続看護に繋がるものである。対象者が安全且つ安心して退院を迎えるために重要な援助である。成人看護学実習の学生の学びをまとめた先行研究[3,8]でも，退院指導に関する学びが報告されている。

【日常生活を中心に身体・心理・社会的側面の情報を踏まえることの意義】について

藤原ら[3]は，急性期の成人看護学実習の学びの報告の中で，学生が退院指導に必要な情報として，患者の心理状態や生活習慣について情報収集する必要性を学んでいたと報告している。本研究でも「身体的側面だけでなく心理・社会的側面からも対象者を観察・情報収集することで退院後にその人らしい生活を送るための支援ができる」「対象者の日常生活を把握することで具体的な退院指導ができることを学んだ」などがあり，A大学の学生も対象者に必要

表４　退院指導の学び　n＝30

記録単位　（ ）内の数字は記録単位数を示した	コード	カテゴリー
対象とのコミュニケーションから得た情報がもととなり対象のニーズを満たせたため，しっかりコミュニケーションをとることが大切	身体・心理・社会的側面からの情報収集が大切	日常生活を中心に身体・心理・社会的側面の情報を踏まえることの意義
対象の状況に合わせた援助を実施するためには，対象と家族を観察し，治療に対する思いや退院後の不安などを聴取することが重要だと学んだ		
対象者の情報が不足していると対象者に合った退院指導ができないことを学んだ		
身体的側面だけでなく心理・社会的側面からも対象者を観察・情報収集することで退院後にその人らしい生活を送るための支援ができる　(4)		
入院前の生活状況や不安の内容を把握することが重要	日常生活を知ることが重要	
対象者の日常生活を把握することで具体的な退院指導ができることを学んだ		
退院後の対象者の生活を知ることが退院指導を行う上で重要と学んだ		
対象者の背景を知ることが一人一人に合ったアプローチにつながる　(4)		
食事や入浴に対する不安を傾聴することで対象者の不安が軽減することを学んだ　(1)	日常生活の不安を傾聴する必要性	
退院後の日常生活について対象者と共に考えることで，対象者自身が注意を要する状況に気づくことができる	対象者と共に考えることが大切	自己管理への意識を高められるようなかかわり方の必要性
一方的に指導するのではなく，対象のパートナーとして接することで対象者自身が今後の生活についてよく考えられると学んだ		
対象者を尊重して共に進めていくことがアドヒアランスを促進するうえで重要であると学んだ		
対象者の不安に寄り添いながら，対象者自身が管理できる方法を一緒に考えていくことが大切であると学んだ		
ただ説明するのではなく対象の反応を確認しながら説明することが大切　(5)		
退院後の生活上の問題を対象者と一緒に考えることが大切である　(1)		
対象にとって分かりやすいように焦点を絞った説明が大切である	対象者の特性に合わせて工夫する必要性	
対象の性格を考えて効果的なかかわり方を考えていくことが必要		
対象の気がかりを汲み取りながら説明の方法や言い方を工夫することで対象の反応が変わる		
強みを生かした援助はセルフマネジメントのモチベーションを高める		
パンフレット作成では対象者の特性を踏まえて理解できるような工夫の必要性を感じた（5）		
退院後の対象者の生活を見据えて関わることが必要	早期から退院後の生活を見据える必要性	多職種と連携して継続的に支援する必要性
退院後を見据えて早期からの看護介入が大切		
回復に向けた支援と同時に退院に向けての指導を進めていく必要があると学んだ　(3)		
生活の再構築を目指したケアを行っていくには，多職種との連携が重要であることを学んだ	多職種連携の必要性	
対象が住み慣れた地域で生活できるよう，対象に適した社会資源の活用につなげることも看護師として重要な役割であることを学んだ		
多職種連携について学べた　(3)		
退院指導を受けても疾患に関連する不安は常に存在していることがわかった	退院指導実施後も継続的な支援が必要	
退院後は外来受診による継続的な看護が大切になることを再認識できた		
退院指導後の行動を観察して不足している部分を補うことが重要である　(3)		

カテゴリー化できなかった記録単位

退院指導を実施してセルフマネジメントの意義を確認できた	(1)

な退院指導を実施する上で，身体・心理・社会的側面の情報と対象者の日常生活に関する情報収集の重要性についての学びがあったと言える。対象者に適した援助を実施するにあたり，基本的な学びと言える。

【自己管理への意識を高められるようなかかわり方の必要性】について

この学びは，成人期にある人に対する教育的かかわりを示すアンドラゴジーの特徴の学びに近い。アンドラゴジーでは学習者の自己主導性が鍵となる。学習者が自らの学習ニーズを学習課題として取り組み，教師は学習のファシリテーターとして学習の方向付けを助ける[9]。記録単位には「退院後の日常生活について対象者と共に考えることで対象者自身が注意を要する状況に気づくことができる」「一方的に指導するのではなく，対象のパートナーとして接することで対象者自身が今後の生活についてよく考えられると学んだ」とある。アンドラゴジーの概念におけるファシリテーターとしての教師の役割を学生が経験したと言える。学生は，退院後の生活の注意点を自ら考えていこうとする対象者の変化を捉えていた。学生が自己の看護実践を振り返る中で，学生のかかわり方が対象者の変化に影響することに気づき，〈対象者と共に考えることが大切〉〈対象者の特性に合わせて工夫する必要性〉を学んでいた。退院指導において，学生は対象者に寄り添う姿勢が対象者の自己主導性を高めた，という看護の意味づけを学べたと考える。対象者の生の反応を受け取ることは臨地実習ならではの体験であり，看護師と対象者の相互作用を考えるうえで重要な学びである。このような学びが増え，学生同士で学びの共有ができることが望ましいと考える。

学生の看護の意味付けについては，指導者側のかかわり方によって学生を安心させることが，学生自身が実施した看護を考えるきっかけになる[10]と報告されている。本研究では学生が臨地実習指導者や教員のかかわりをどのように捉えているかは分からない。しかし，看護の意味付けができた学生がいることは，学生が安心して学べる学習環境が整えられていることを示す一つの結果であると考える。今後も，指導する側は単に問いかけるだけでなく，学生が安心して考えられるような場を作る必要がある。

【多職種と連携して継続的に支援する必要性】について

このカテゴリーを構成するコードのうち〈早期から退院後の生活を見据える必要性〉は，早期から退院支援を考える必要のある病棟看護師の役割を学べた意味があるだろう。森本ら[11]は，看護師が実施してる周手術期にある患者の退院支援に関して文献検討を行っている。対象となった文献には，白内障手術後やストーマ造設後の患者への退院支援について記されており，看護師が対象の状況に応じて指導回数を増やしたり，統一された指導を実施するためにマニュアルを見直したりしていることが示されていた。退院指導は，術後の対象者であれば主に術後障害に適応するためのセルフケア技術の習得にむけた教育的なかかわりであり，外来での継続看護に繋がるものである。A大学の学生が受け持った対象者の状態も，手術後の身体機能の変化に伴いこれまでの生活の中に療養行動を取り入れて生活の再構築をしていかなくてはならない場合が多い。記録単位には「退院後の対象者の生活を見据えて関わることが必要」「退院後を見据えて早期からの看護介入が大切」等がある。これは入院期間の短縮化に伴い，早期からセルフケア技術の習得に向けた退院支援が必要な急性期・回復期の退院指導の特徴の学びと言える。

コード〈多職種連携の必要性〉〈退院指導実施後も継続的な支援が必要〉は，対象者の退院後の生活を支援する上で複数の専門職種の介入が必要であること，そして退院後も対象者の療養生活は続いていくことについての学びと言える。森本[11]らの報告では，看護師は，入院中に多職種と連携して患者の自己管理を支援し，退院後の生活に向けて地域連携をしていることが示されている。記録単位にある「生活の再構築を目指したケアを行っていくには，多職種との連携が重要であることを学んだ」は入院中の多職種連携についての学び，「対象が住み慣れ

た地域で生活できるよう，対象に適した社会資源の活用につなげることも看護師として重要な役割であることを学んだ」は退院後の生活に向けた地域連携についての学びと考える。成人看護学実習における学生の学びの報告[3,8]には，退院指導に関する学びも含まれているが，これらの先行研究では多職種連携の必要性についての学びが示されていなかった。A大学では実習目標に看護師の役割と機能を学ぶことを掲げている。看護師の役割と機能について考えることで，退院指導における多職種連携や継続看護の学びがあった可能性がある。今後も同様の学びが得られるよう実習指導していく必要がある。

一方で，コード〈多職種連携の必要性〉の記録単位である「多職種連携について学べた」に示されるように，なぜ多職種連携が必要と実感したのか，その理由の記述がない場合がある。援助を実施した体験から得られた考えを述べることは，実習目標[4～6]の急性期・回復期にある対象者への看護の意義や看護の役割の理解につながるため，これらの記述が増えていくことが望ましいと考える。

分析過程において，カテゴリー化できなかった記録単位「退院指導を実施してセルフマネジメントの意義を確認できた」もあった。学生の学びとして抽出したが，どのような意義を確認できているのかは不明であった。学内実習時の面接時などに学生の考えを引き出し，学生が看護の意義について考えを深められるような実習指導が必要である。

レポートに記載された学生の学びの中で退院指導が最も多かったことについて，退院指導が学生にとって強く印象に残った学びであることはすでに述べたとおりである。術後は対象者の日々の変化が大きく，情報の整理が困難な場合が多い。先行研究でも周手術期の患者は回復が早く，学生はタイムリーに必要な情報を系統的に収集し回復過程に沿ったアセスメントをすることが困難[3]であることが報告されている。対象者の全身状態が安定する回復期には学生の対象理解が追いつき，退院指導に集中して取り組めたことが記録単位の数に影響したと考えられた。

3）清潔ケアの学び

清潔ケアの学びは退院指導に次いで記録単位が多かった。急性期にある対象者はセルフケアが著しく障害されるため，学生が援助する機会は多い。援助する機会の多さが記録単位の数に影響したと考えられる。しかし，学生の学びには，「患者状態を観察しアセスメントしていく必要性を学んだ」「対象者に合わせた援助方法を選択することの重要性を学んだ」等，具体性に欠ける内容が目立った。これらはセルフケアが不足している人すべてに当てはまる内容である。学生が急性期・回復期の身体・心理的変化を観察しながらどのようにセルフケアを支援したのか，その経験からどのような看護の意義を学んだのか記述されることが望ましいと考える。今後の実習指導として，対象者の術後の回復を促進する看護としての清潔ケアの意味づけを意図した指導が必要であると考えられた。

4）術後の早期離床の援助，疼痛緩和，術前の合併症予防指導について

術後の早期離床の援助，疼痛緩和，術前の合併症予防指導は周手術期看護において重要な内容である。これらについての学びの記述が少なかったことの背景として，実践の難しさが考えられた。術後1～2日目あたりでは，学生にとって情報の整理ができないまま離床が進んでいく。そのため学生が主体的に関わるのは難しく，見学となる場合が多い。初回離床援助の実践における学生の困難として，手術を受ける患者や初回離床のイメージが持てないことや実践の機会が少ないこと[12]，術後早期離床ケアOSCEにおいても術後1日目の看護実践場面での状況判断の困難さ[13]が報告されている。本研究では必ずしも初回離床についての記述だけとは限らないが，文脈より術後数日以内と考えられた記述を早期離床の援助として抽出した。

実践が難しい場合は，早期離床時の対象者の反応をよく観察し，医療者の対応を見学することが重要である。教員は学生が早期離床を見学して学んだことを確認し，不足を補い，早期離床の学びの意識づけを強化する必要があると考

えられた。

疼痛緩和の記録単位が少ないことについても，早期離床の支援と同様に実践の困難さがあると考えられる。清水ら[14]は，新人看護師の術後疼痛に対する援助において対象者の状態の把握やアセスメントの困難さを報告している。新人看護師においても困難であれば，看護学生にとっても援助は難しいと推察できる。特に術後疼痛のピークは術後24時間程度であり，時宜に合った援助が求められる。術後の疼痛管理には薬剤の使用が中心であり，学生が直接関与する看護技術ではない。しかし，薬剤の効果のモニタリングやポジショニングの工夫，同一体位による苦痛の除去を目的とした温罨法等，学生が実施できる既習の看護技術もある。学生が対象者の回復を支援できるように，教員は学生の疼痛に関するアセスメント内容を把握し，既習の知識を想起させ，時機を逃さずに指導する必要があると考えられた。

術前の合併症予防指導は，近年は在院日数短縮化のため外来で指導されている場合が多い。入院後はすぐ手術当日を迎える。術前から受け持つ機会があるかどうかだけでなく，学生がケアを実践するには時間的な問題があると言える。

実践の難しさが課題レポートの記述内容に影響すると考えられることについて，今後の実習指導として，見学したことの学びの意識づけを強化すること，看護学生にも実践可能な技術は時機を逃さずに実践できるよう指導すること，が考えられた。また，回復期には学生の対象理解が追いつき，集中して学修できると考えられることから，改めて，術後の対象者の回復が入院前からの合併症予防指導や急性期の治療・ケアの延長線上にあることの確認も必要である。そのためには，学生の対象者の変化の捉え方を把握し，その変化と，術前から術後の回復期に至るまでの医療者の支援を結びつけて考えられるよう指導していく必要があると考えられた。

7. 研究の限界と今後の課題

本研究はレポートに記載された内容を分析対象としているため，学生の認識を深く掘り下げたものではない。援助を実施して得られた学びのみを分析している。レポートでは，実習を通しての今後の課題についての記述もあるが,分析対象からは除外した。また，実習では，テーマカンファレンスや教員との面談も設定している。これらの学びも影響していると思われるが，本研究では分析対象としていない。今後，これらの影響について検討することが必要と考える。

学生の学びは術後の看護の中でも退院指導に関する内容が多かった。今後学生が受け持つ対象者の状態によって学びは変化する可能性はあるが，退院指導だけでなく，周手術期の看護全般についてよく思考し，レポートにまとめられるような実習指導が課題である。

8. 結論

成人看護学実習Ⅰにおける学生の学びを明らかにするために，レポート分析を行った。

- 学生は周手術期の対象者を受け持つ機会が多いが，レポートへの記述内容には偏りが見られた。
- 退院指導と清潔ケアの学びが多く記述されていた。退院指導では教育的かかわりの必要性や多職種連携の重要性を学べていた。清潔ケアでは，ケアの意味づけが必要であると考えられた。
- 早期離床の支援や疼痛緩和など，急性期看護の実践の困難さがレポートへの記述量に影響していると考えられた。学生にとっての実践の困難さを踏まえた実習指導が必要である。
- 術後の対象者の回復が入院前及び急性期の治療・ケアの延長線上にあることを強調して指導する必要があると考えられた。

引用文献

1）文部科学省　看護学教育モデル・コアカリキュラム「学士課程においてコアとなる看護実践能力の修得を目指した学修目標～の策定について」2017.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/1397885.htm（2022年12月12日参照）

2）田島桂子．看護学教育評価の基礎と実際 看護実践能力育成の充実に向けて第２版．医学書院；2019.20.
3）藤原正恵，江口秀子，葛場美那．成人看護学実習Ⅱ（急性期）における学生の学びー実習終了後のレポート分析を通してー．大阪青山大看ジャーナル．2018；2：58–68.
4）原島利恵，直成洋子，小幡明香，他．成人看護学実習と総合実習（成人）の学生による実習評価ー授業過程評価スケール（看護学実習用）を用いてー．茨城キリスト教大看紀．2016；8(1)：47–55.
5）森安朋子，趙崇来，利木佐起子．成人看護学実習Ⅰ（急性期）における学生のルーブリックの活用と有用性の実態．保健医療技論集．2020；14：37–48.
6）柏崎純子，中野実代子，嶋田未来，他．成人看護学実習にテレナーシングを導入した教育プログラムの効果ー患者教育プラン実施に対する学生の自己評価からー．共立女大看誌．2022；9. 1–12.
7）舟島なをみ監修．看護学教育における授業展開　質の高い講義・演習・実習の実現に向けて第２版．医学書院；2020.62.
8）田中初枝，三ツ井圭子，眞鍋知子．成人看護学実習における学生の学びと看護実践能力の関連．了徳寺大研紀．2018；12：105–115.
9）佐藤栄子編．事例を通してやさしく学ぶ中範囲理論入門第２版．日総研出版；2013.478.
10）大黒理恵，二宮彩子，齋藤やよい．初めての看護学実習経験を意味づけた実習指導者からの印象に残った言葉とその理由．お茶の水看誌．2011;5(2):50–58.
11）森本直樹，粕谷恵美子．周術期にある患者の退院支援に関する文献検討．修文大学紀要．2017；9：119–126.
12）橋本茜，堀田由季佳，石田咲，他．初回離床援助の実践における看護学生の困難ー成人看護学実習後のインタビュー分析からー．日赤豊田看大紀．2019；14(1)：81–89.
13）安井大輔，小澤知子，濱田麻由美，他．術後早期離床ケア OSCE のふりかえりをとおしての学生の学びと気づき．東京医療保健大紀．2014；1：23–30.
14）清水綾香，内海元美，高橋忍，他．新人看護師が捉える術後疼痛に対する援助を行う上での問題と対応．日看会論集：看管理．2012.46–49.

受付日　2022年10月28日
受理日　2023年　2月　6日

Student Learning in Adult Nursing Training I (acute and recovery phases)

Emiko Motegi, Kazuko Kawakubo, Kana Watanabe, Yuko Fujita, Eiko Sato, Midori Aoyama
Faculty of Nursing, Ashikaga University

Abstract

【Purpose】To clarify student learning in Adult Nursing Training I as a basis for developing future perspectives on clinical supervision.

【Methods】Descriptions of the nursing support provided by students and their learning were extracted from their reports. Recorded units representing student learning were aggregated, and qualitative analysis was performed for discharge guidance with the highest number of recorded units.

【Results】The recorded units representing student learning through discharge guidance accounted for 40% of the total, and were classified into 3 categories: <significance of focusing on daily life with information about physical, psychological, and social aspects taken into account>, <necessity of approaches to raise awareness of self-management>, and <necessity of continuous support through interprofessional collaboration>. In contrast, fewer units were recorded for early mobilization support, pain relief, and guidance for preoperative complication prevention..

【Conclusion】There was some bias in the student reports. Students effectively learned about discharge guidance as important nursing care during the post-acute period. On the other hand, the results indicate the necessity of supervision to help students provide appropriate nursing support approaches that are difficult for them, such as early mobilization support and pain relief, and understand that the post-acute period is an extension of the treatment and care provided prior to hospitalization.

Key words : adult nursing training, acute and recovery phases, nursing student, discharge guidance